子どもを見る、子どもを知るということ

東京都台東区立御徒町台東中学校教諭　甲斐（かい）利恵子（りえこ）

子どもを知る、子どもを理解するということの大切さは十分理解しているつもりです。しかし、毎日の忙しさの中で、子どもたちを知る時間がなかなかとれません。先日も生徒に、「先生はわたしたちのことをちっとも分かってない。」と言われ落ち込みました。子どもを知るにはどうしたらよいか教えてください。

子どもを知るということは、何にもまして大切なことですよね。すべての始まりは子どもを知ることだと言うことができるかと思います。子どもを知るための時間がないと嘆いているようですが、心配いりません。子どもを知るのに特別な時間など必要ないからです。授業を通してわたしたちは子どもを知ることができます。また、そういう知的なことに向き合っているときの子どもの姿をしっかり見てこそ、授業を生み出す教師の力はつくのだと思います。

子どもたちは心を開いているときに本当の姿を見せます。では、どんなときに心を開くかというと、何かを本気で求めているとき、夢中になっているとき、自分を理解している相手がいるときではないでしょうか。では、子どもたちの姿が見えるためのいくつかの小さな学習を紹介しましょう。

子どもの名前を覚える

まずは何より名前です。名前を覚えていない教師に子どもが心を開くはずはありません。名前を覚えるためのいくつかの例をご紹介します。

■とにかく名前を覚える

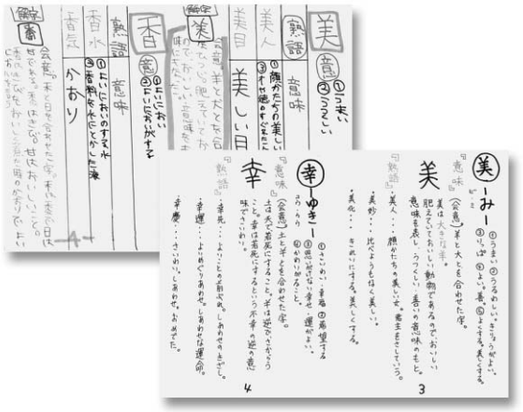
「とにかく覚えるぞ！」という覚悟を固めてください。まずは、名簿順に名字と名前の組み合わせを覚えます。生徒が単語を覚えるために使う単語カードを使ってもいいですね。表に名字、裏に名前。わたしはノートを右・左の半分に分け、名字を左、名前を右にして新学期が始まる前に覚えました。もちろん、ノートなど使わず、名簿を拡大して半分に折るという手もあります。ゲーム感覚で楽しみましょう。赤田君は直也、飯島君は幸太というように。この名字と名前の組み合わせを覚えていると、入学式のときから名前で子どもたちを呼ぶことができます。入学式って名簿順に並びますから。名前を呼ばれたときから、コミュニケーションが始まるのだと思えます。初日から名前で呼ぶ教師に、子どもたちは大いに安心感を持ったように思います。上級生の場合でも、名簿を折あるごとにながめるといいですよ。

■名前を材料にした小さな学習を

いちばん手っ取り早いのは、「名前を丁寧に書きましょう」という学習です。硬筆でも毛筆でも、丁寧に名前を書く学習ですね。書写の授業ですぐにできることですね。

次にできるのは、「名前を調べる漢字学習」も考えられます。漢和辞典で自分の名前に使われている漢字を調べます。漢和辞典の引き方などの学習もかねてできます。ひらがなだけの子どもも、「もし、漢字で書くとしたらどんな字がいい？」と聞いて調べさせます。外国籍の生徒の場合も同様で、どんな漢字を当てはめたいか考えさせます。一人ひとり違う材料で、その子の名前について語り合えます。ミニ本にするのもいいですね。（資料1）

また、「名前の折句」（資料2）などもよくやっておられるのではないでしょうか。変な言葉が出ないようにもちろん事前に手当ての準備が必要ですが。



◀資料1　※漢和辞典を活用して

◀資料2［折句］

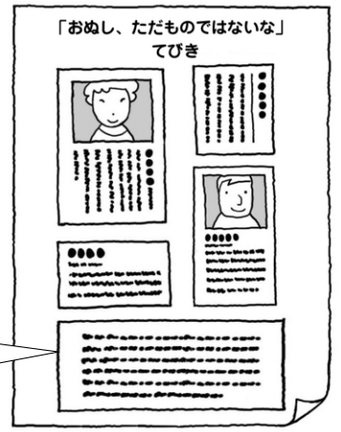
㋐わいがられた末っ子です
㋑ちばん好きな言葉「笑って、笑って」
㋒りんちゃんと呼ばれてました
㋓えがおを忘れずにがんばります
㋔れからもよろしく！

自己紹介のさまざまな工夫を

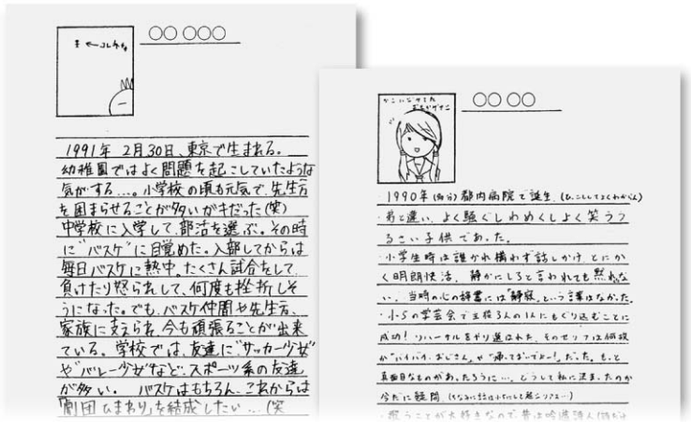
もう、新学期ではないし…なんて、心配する必要はありません。もちろん新学期の方がタイムリーではありますが、いつでもできることです。出身小学校を言うことだけが自己紹介ではないからです。上級生にもぜひやってほしい自己紹介を今回は紹介します。こんな人だったのか、こんな一面もあったのかという驚き。知っていると思っていたのにあらたな発見があるというのは楽しいことです。

■ミニ単元「おぬし、ただものではないな」［てびき］

※文庫本などのカバーの裏にある著者紹介文をいくつか提示する。



［文例］
～に目覚めた
～に失敗
～に夢中になる
～で挫折
○○賞を受賞
～が得意
～との評判が高い
家族は～
友だちに～
学校では～
将来～



このような学習のあと、大変ではありますが、文集のように冊子にすると学習が形になります。冊子にすると、それを使ったスピーチに発展できたり、コメントを書き合う学習ができたりします。振り返りをするのにも便利です。どんな力をつけるためにやったのかを確認するといいでしょう。

一学期は「導入の学期」

一年間を通して言えることですが、特に一学期は小さな単元をいろいろやってみるといいと思います。新入生はもちろんのこと、新学期の中学生はどんな表れであれ、やる気に満ちています。新しい集団の中で、新しい自分に出会うことを期待しているのです。そんな時期に、小さな学習をあれこれやって、どんなことに興味を持っている人なのか、どんなことに心を動かされる人なのか、書くことはどうか、漢字はどうか、辞書を引く習慣はどうか、読書に興味を持てそうか。さまざまな学習をしながらさまざまな表情を見ていきます。

自分が同じようなことをやっているのに、子どもたちを決めつけてしまっていないか、振り返ってみてはいかがでしょうか。一学期全体を「導入の学期」と設定すると、いろいろな工夫が浮かんできます。

大村はまさんは、著書『新編　教室をいきいきと1』（ちくま学芸文庫）の冒頭で次のように述べています。

子どもを知るということ、子ども自身より深く知るということ、親をも越えて子どもを知るということ、これがまず教師として第一のことでしょう。

もちろん、本人自身より知ること、親をも越えて知ることは容易なことではありません。けれど、家とは違う学校生活の中では、今までとは違う、さまざまなことに出会っています。本人すら気付かない、親も知らない心の動きや行動が立ち現れます。そのときそのときに教師がかかわっていれば、一人ひとりが違う存在として見えてきます。わたしたちは、「子どもを見る」「子どもを知る」プロなのです。

子どもとどのくらい「かかわれる」か

さて、ここで押さえておくべき大事な点は、「かかわる」ということです。子どもを見る、子どもを知る力は、その教師にもともと備わっているのではなく、一人ひとりの子どもとどのくらい「かかわれる」教師なのかが、鍵になると思います。言葉をかえれば、子どもが見えるような場面を設定する力が、実は結果として「見える力」「知る力」になっているのです。

みんな一緒のときに見える姿もありますが、国語の教師としては一人ひとりの姿が立ち上ってくるような単元を作りたいですね。先ほど紹介した小さな学習を始め、グループで動かしてみたり、クラス全員で取り組んだり、学習の場を柔軟性のあるものとして考える習慣があるといいですね。

子どもを知るために、アンケートを取ったり、個人的に呼んで話をしたり、ということも可能ですが、残念ながら時間がかかる割に手応えは今ひとつです。それなりの効果は期待できますが、心を開かない状態で出てきた子どもの姿はほんの一面にしかすぎません。

授業の中で常に一対一の対話を実現しようと工夫すること、同じ目的に向かって子どもと苦労すること、こんなことの中から子どもの姿が見えてくるのではないでしょうか。

優雅に見える白鳥が、実は水面下で必死に水をかいているように、子どもを知るために、わたしたちは日々工夫を重ね、努力をすることが肝要だと思います。「子どもを知る」ということを「喜び」と感じることができれば、努力は苦にならないかと思います。あなたは子どもを知ることが楽しいでしょうか？　きっと楽しいですよね。